

# あなたの声に導かれ あなたと共に歩む

砂漠や雪原などの何の目印のない広い場所を自分の感覚だけで真つすぐ歩くと、200メートルくらい行けば5メートルぐらいずつ、その人の利き手の方に曲がつていくそうです。ですから歩めば歩むほど、ぐるーっと回って元いたところに戻る、これを循環彷徨というそうです。

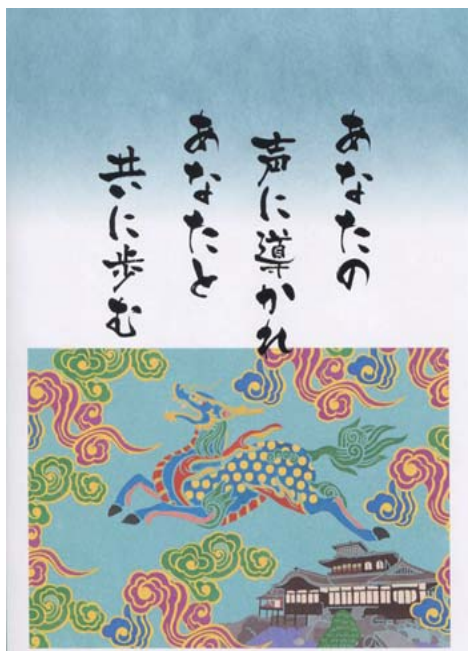
仏教では「六道輪廻」という考えがあります。

**地獄**（我利我利者と鬼のいる争いの世界）

**餓鬼**（満足を知らない存在）

**畜生**（己を省みることのない存在）

**修羅**（争いの絶えない世界）



## 人間

**天上**（自分に有頂天になっている）

**天人の住む世界**

を言います。このような存在や世界は決して死後の事ではなく、今私達の生きているこの世の事ではありませんか!? そのような世界の極致をウクライナやガザ

の戦争において私達はみることが出来ません。そして、この六道に連なる、いや、

時によつては六道そのものに落ちていくのが私自身の姿ではないでしょうか。その

ような生き方を仏教で六道輪廻と言います。「自分は人生を真つすぐ歩んでい

る」と思い込んで、結果的に六道という迷いの世界をぐるぐるめぐるとめぐる事になつてしまうのです。そうした迷いから

抜け出すことを目指すのが仏教です。「仏法とは仏の教えのことですが、い

まお前さんはどこにいる? と教えてくれる一枚の地図だと思えます。人生に

も、一枚の地図が必要です。仏法という地図は世界で一番精巧で、正しい地

図だとは私は聞いています」と語ったのは司馬遼太郎です。

その地図が私をして「迷っている」と気づかしてくる、その気づかせて下さるはたらきを「仏法（如来）」と呼ぶのです。阿弥陀仏（如来）は私を

離れてどこか遠い清らかな世界にいるのではなく、迷いのただ中にある人生（六

道）を輪廻しているこの私が心配で、いつもよりそつて下さっているのです。

明治の初期に仏教精神に根ざした女子学校（京都女子大学）を創立し、生涯

を女子教育に捧げられた甲斐和里子という方の詠んだ歌に、

**み仏を呼ぶ わが声は**

**み仏の われを呼びます**

**み声なりけり**

があります。ナンマンダブツとみ仏を呼んでみたけれど、それは迷いの人生を歩む私を放っておけないという、阿弥陀

さまの呼び声だった、という味わいです。阿弥陀さまの呼び声に導かれ、人生

の地図を片手に人生を歩んでまいりま

しょう。